# 第 16 期「夢・未来」講座各回の感想

本資料は、「夢・未来」講座ごとに、学んだ点や感想等を受講者に求め、毎回 10 名前後をとりまとめ、受講者に配付したものです。目的は、記載された受講の視点や講座の振り返りを演習校での教育実践演習に生かすことです。

## 第１回〔２月１日（水）〕開講式

**講座内容：①主催者挨拶・説示　　②講演「先輩修了生からのエール」**

○　今回の開講式で学んだなかで、以下の二つの視点から実践演習に取り組み、教員としての実践に生かしていきたい。

まず一つ目は、積極的な行動をすることである。木上教育次長や谷井先生、谷アドバイザーの話を聞いて、自分から学ぶ姿勢の重要性が大切だと気付かされた。先生方が仰っていたように、年度末と新学期を継続的に見ることができたり、各分野のエキスパートの方々の講演を受ける事ができたりするこの貴重な機会に、積極的に参加することでより深い学びを実現したいと考えている。

そして二つ目は、周囲の学生とのつながりを大切にするということである。私は、演習校のメンバーに知り合いがいないこともあり、今回の出会いを大切に学生同士協力して学んでいきたいと考えている。また、夢・未来講座では毎回の講義後には個人的なまとめとポートフォリオを行い、学んだことをどう教育現場で実践されているのかという視点をもって学び、実践演習での学びにつなげたい。

以上の二つの視点から、今後の教師力養成講座に取り組んでいく。谷井先生のような、児童一人一人に寄り添い信頼関係を構築できる教員になるために、積極的に、周囲と協力して学び、しんどい時に頼れるような仲間との人間関係を築きながら学んでいきたいと考える。

○　今回の講座では、教員としての実践に活かす意識で演習に取り組むことを学んだ。そのためには、「先生」としての自覚を持ち、児童へ真摯に対応するようにしたい。教師力養成講座では、積極的に学ぶ姿勢と、教職員や他の実習生とつながる意識を持って取り組んでいきたい。

積極的に学ぶ意識として、夢・未来講座は「受ける」姿勢ではなく、「考える」姿勢で取り組む。講義には必ず意見や質問を持ち、実際の場面を自分の視点から想像し考えるようにする。質問することでより深い講師の考えを学ぶだけでなく、自分の考えを持つことで実践する機会を得やすくなる。学びを実践につなぎ、演習に活かしたい。また演習では、自ら関わる中で児童のことを知り、児童との信頼関係を築けるよう努力する。休み時間や机間指導の中で、児童個人、または児童集団と積極的に関わり、それぞれの児童の良いところや努力、成長に注目し、児童の見立てをもつ。それを活かして授業実践できるようにする。

教職員や他の演習生とつながる意識として、報告・連絡・相談を大切にする。特に個人指導や授業の実践の後は必ず行う。報告や連絡は自身の信頼に関わるとともに、演習生同士では学びの共有につながる。複数人で演習に臨む教師力養成講座の特徴を活かし、学びや考えを深めていきたい。また相談は、自身の行動や態度を振り返り改善することにつなげるとともに、自分にはなかった考えを得る。先生方や第三者の意見をもらう機会を積極的に持ちたい。どんなことにも一生懸命に取り組み、教員を目指すものとしてより学びのある演習としていきたい。

○　教師にとって必要不可欠である「信頼の獲得」に生かしていきたい。特に児童生徒、保護者、教師陣から信頼を獲得するために以下の内容を実践していきたい。

児童生徒から信頼を獲得するために、児童生徒一人一人をよく観察することを行っていきたい。今後の演習や教員になった際、児童生徒とその周りの状況をよく観察し、目の前の児童生徒に対する理解を深めていきたい。観察とそれによる児童生徒への理解の向上は、谷井先生のように教育相談が楽しみと思ってもらえるような安心と信頼のある教員になるために必要なことであると考える。

保護者の方から信頼を獲得するために、こまめな連絡を大切にしていきたい。私が考える保護者への連絡は、何か問題があった時にするものであったが、それだけでなく、児童生徒の成長や褒めたい

ことを保護者の方にお伝えすることで、この先生なら安心して任せられると思ってもらえるような信頼感を獲得したい。

教師から信頼を獲得するために、一生懸命かつ謙虚に学び動くことをしていきたい。木上教育次長や谷井先生からもあった通り、一生懸命かつ謙虚に学ぶ姿勢は誰かが見ているし、そういった人は助けたくなるものである。小さい雑務をもきちんとこなし、積極的に教師の方々とコミュニケーションをとり自分から学びを吸収していく姿勢を大切にしていくことで、自ずと信頼の獲得はついてくるだろう。

○　私がこの講座に応募した理由の一つは、貴重な経験を積むことが出来るからでした。今回の開校式でも、そのことがどれだけ有意義なのかが分かりました。せっかくの機会を無駄にしないよう、「学生だから、初めてだから」という言い訳をするのではなく、初めての経験や挑戦を学生のうちに経験しておけると考え、自分から仕事や問いを見つけ、学びを深めていけるよう、周囲にその熱が伝わり応援してもらえるような積極的な態度を前面に出して動いていきます。

お話の中にもあったように教育現場に入り、生徒の前に立つということは、いつでもどこでも教員としての振る舞いが求められます。実習を経て慣れてきた部分があるからこそ、教員の当たり前なルールを再確認し、十分すぎるほど意識していきます。また、これまでの実習から、生徒との関係づくりがまずは大事だと学んできました。生徒を理解し、生徒に理解してもらうことで初めて、授業や指導の具体的な課題や、教員のやりがいが見えてくると思います。１日目から生徒や先生方と積極的に関わり、話を聞き、こちらからも話をすることでつながりを広げながら、人として、教員として幅と深みのある人間になっていきます。

○　闇雲に演習に取り組むのではなく、「どんな教師になりたいのか」など、目標を掲げながら取り組むことで、養成講座での学びをさらに深いものにしていきたい。今日の講義の中では、谷井先生のように、授業改善に前向きに取り組む、生徒の相談に真摯に対応したりなど、生徒にとってよいを追求し生徒との時間を大切にする教師になりたいなと思った。

「教師というのは、生徒の一生にかかわる仕事である」、演習校の生徒にとっては実習生であっても先生に部類される。特に、教師の言葉は良くも悪くも生徒の心に影響を強く与えると危機感を抱いている。そのため、生徒と向き合うときに使う言葉や表情に細心の注意を払う。谷井先生がとても言葉遣いが丁寧であり、感動したため、谷井先生のような言葉遣いができるように意識していきたい。

実習中は受動的に取り組むのではなく、学んだことを活用して試行錯誤を何度も何度も行なったり、質問をさせていただいたりするような能動的な姿勢で取り組む。

考えを深め、悩みを一人で抱え込まないためにも、同じ実習校のメンバーや、それ以外の養成講座の仲間との会話を積極的に行いたい。多様な考え方に触れる機会にもなると思うので、ぜひ積極的に声をかけていきたいと思う。

○　この開講式を通して私は二つのことを学んだ。一つ目は教員を目指す者であるという自覚を持ち、自分は児童生徒に影響を与える存在であるという意識を常に持って臨むことだ。二つ目は演習などにおいてはどんな児童・生徒を育てたいか、ということや自分ならどう支援するか、という実践を意識して観察に臨むことだ。

講座や演習を有意義なものにするため、漠然と取り組むのではなく目的を持って臨む姿勢を身につけたいと考えた。具体的に、講座では学んだことを短く説明できるようにするため、キーワードでメモを取ることを心がける。なぜなら説明することでより内容が定着し、説得力のある説明の仕方を身につけられるからだ。また、このことは児童・生徒に物事を説明するときも、端的に分かりやすく説明することに役立つと考える。また、演習では、研究授業や教員になった時のことを意識し、支援に注目する。この教師力養成講座を通して児童・生徒が、自分らしさを発揮しつつ自立して生きることができるよう支援していく教員になることを目指す。

第２回〔２月 12 日（日）〕オープン講座（オンライン）
講座内容 ： ①講義「教師のやりがい・使命」
②講演「第２期京都府教育振興プラン」

○　小学校で演習を行う中で、外に遊びに行くよりもタブレットを見つめている児童が多いと感じていた。学校という場が子どもたちにとって新鮮な出会いの場となるように、子どもたちに不足している経験や感動を与えられる指導を行いたいと考える。また、大人の言葉によって作られる潜在意識によって子どもの思考が決まることを学び、教師の一言が子どもの自己肯定感に影響を与えることを自覚しなければならないと感じた。子どもに限らず、叱られた言葉はどれだけの褒め言葉よりも、強く印象に残ると聞いたことがある。何かができたことを褒めるだけでなく、ただ居るだけで存在を認められているかのような声かけを行うことも実践していきたい。

京都府が同和対策にいち早く取り組んでいたことを知り、京都府の教育が人権教育を基盤とし、現在では「包み込まれている感覚」として示していることとのつながりが見えた。現在行っている小学校演習では、教科担任制や ICT 教育が進められていることを実感している。最も子どもに近い教師としてプランをよく理解し、京都府の教員である自覚を持って指導を行いたい。そのために、プランの背景にある京都府の子どもの実態を知っておくことが重要だと考える。

○　活かしていきたいことが大きく分けて３つある。

１つ目は、「笑顔を意識すること」である。講義から、笑顔は伝染しやすく、学級の雰囲気に影響することを知った。教師が不機嫌そうにしていると教室が暗い空気になることは、私自身が経験したことがある。児童の笑顔が多いという学級の空気作りは、学級運営において土台となる。演習中において、必死になって笑顔がなくならないように意識したい。少なくとも、児童と話すときの第一印象は笑顔だと思われるようにしたい。

２つ目は国の教育施策に関心を持つことである。京都府の教育プランを主に見ているが、根本は国の教育施策である。なぜ、このプランがあるのかを理解しておくことで、本質的な理解になると考える。

３つ目は学び続ける教師でありたいということである。講義で、教師は本を読む必要があると学んだ。子どもは好奇心の塊である。この好奇心に答えていくには常にアップデートしていかなくてはいけない。アップデートの方法は沢山あるが、最も取り組みやすいのが本を読むことであると考えた。知識を得ることにはどん欲に、幅広い本を読んでいる教師になりたい。今すぐからできることとしては読書の習慣をつけることである。

○　子どもの自己肯定感をはぐくむために包み込まれているという感覚を大切にしていきたいと思います。そのために教員としてできることは子どもの可能性に蓋をせず、子どもに寄り添うことだと思います。子どもが何かをしたいという気持ちを大切にして、それを実現するために教員ができることを全力でしていきたいです。また、いつもと違う小さな変化から子どもの SOS に気づいて早期発見早期解決をしていきたいです。子どもの SOS は子どもを良く知っているよく見ることで気づけることがあります。自分だけではわからないこともあるため同じ学年の先生、保護者の方と情報を共有し、多様な面から子どもを見守ることで包み込まれているという感覚を感じるようにしていきたいです。

○　私は、今回の学びを京都府が掲げる教育の推進、教師力の向上に活かしてきたいと考える。まず、京都府の教育の特徴として、同和加配、第一期振興プランの背景などから人権教育に重点が置かれていること、歴史的建造物、文化が根付いている強みがあることを改めて実感した。私は、学校教育が持つ公教育の役割の推進に尽力することを目標として掲げているため、承認することを通して生徒自身が他者へ承認できることを促すことや、LGBTQ や同和問題に関する教育などに力を入れ、生徒の人権に関する意識を高め、誰も排斥されることなく学校に通い、学ぶことができる環境づくりに努めていきたいと思う。また、社会科の教員としては、歴史的要素が根付いていることを活かし、先人が受け継いだ財産を次の世代に引き継ぐ力を身につけさせていきたいと思う。

○　本講座での学びを踏まえ、今後の演習や実践に活かしたいことは二点ある。

まず、一点目は、存在承認を満たせる声がけをする。私は、教員としての働きのうち、セーフティーネットという役割に大きな意義を考えている。そして、京都府が目指す教育環境のなかでも、生徒の成長や自己実現に携わる者全員が一丸となって、生徒の「包み込まれているという感覚」を育もうとする点に強く共感している。前者の教育的意義と後者の目標を軸に、生徒一人一人の存在を受け入れ、認め、包み込むことが出来るように、日頃から声がけに努め、信頼関係の構築に励む。

次に、二点目は、振興プランの方策の視点から授業案と学習機会の保障について考える。本振興プランは、校外の専門的人材に協力を仰ぎ、物的資本を活用することで、より生徒が学びに集中できる環境を目指している。このねらいを踏まえ、演習では教員の方々がどのような視座に立ち、どのような方法で ICT を活用しているのかという点を積極的に学ぶ。

以上の二点が、今後の演習や実践に際する私の活かし方である。演習では誠実な態度を徹底しつつ、積極的に業務に携わることで、知識や技術、教育者としての志を吸収していきたい。

○　今回の講義では、久保先生から教師のやりがいや使命について学び、また「第２期京都府教育振興プラン」がどのようにして考えられ、作られたのかについて学んだ。

講義を通して、京都府の教育が目指す「包み込まれている感覚」がどのようにして生まれたのか、また久保先生のお話から具体的に「包み込まれている感覚」を養うにはどうすればよいかということが分かった。まず「包み込まれている感覚」とは、京都府が重視している人権教育から生まれたものである。そして、多様性の理解を基盤としながら子どもに必要な承認欲求を満たし、社会に新しい価値を生み出せるような人間像を目指すものである。これは久保先生のお話で言えば、教師の使命の一つである、子どもの「自信を育てる」ということである。「自信を育てる」とは、児童が「先生は自分の良いところを認めてくれている」と感じられるような言葉がけや関わりを目指すことである。このことを受けて、私は教育現場において、児童の短所を改善するよりも児童が成功体験を積める授業を行い、長所を伸ばす教育を実践したいと考えた。

第３回〔２月 18 日（土）〕特別講座
京都教育大学教職キャリア高度化センター主催　「学び続ける教員へのメッセージ」講演会
これからの教育（令和の日本型学校教育）と教師に求められる資質・能力
「一人ひとりの子どもを主語にする学校をつくる」

○　私が今回の講義で印象に残っているのは「常にゴールを意識する」「子どもにとって意味があるもの」という言葉である。
　学校とは、子どもを育てる場所であり、学校のあらゆる物・事は本来、全て子どものためにあるものである。決まりは、子どもを守るためにあるはずなのに、今となっては、子どもを縛ったり、大人にとって都合よく動かしたりするためにあるのではと感じることがある。また、実習演習でも、最初は子どものことで悩み、その解決策として考えた方法が、いつしか「自分がしたいこと」になっていて、ゴールにしている子どもの姿とその方法に因果関係があるのか考えることもあった。教師として、方法に捕らわれ、目的を見失わないように、自分の価値の押し付けにならないように、常にゴールを意識し、それが子どものためになっているのかと度々振り返って確認する必要があると感じた。
　私は、熱中すると「あれもこれも」となって、浮かんだアイデアを端から試していこうとなってしまうところがある。でもそれは自分本位で、「子どものため」からは少しずつ離れていくのかもしれない。自分のアイデアが出た時にも、「この方法を取る目的はなに？」と自分と対話しながら、また、その方法を試したときに子どもから帰ってきたリアクションを見ながら、一歩一歩着実に子どものための教育をしていきたい。

○　学習の個性化において現在不十分であるとされた「課題の設定」について、児童が行う機会を設けるために小学生の段階では、まず教師が授業のめあてにしたい言葉が児童から自然とでるような発問及び疑問を生み出す導入にすることを心がけるとともに、演習校での体験授業や研究授業において早速実践していきたい。
　演習において体験授業や研究授業の構想を練る段階に入ったが、ただわかりやすく指導するだけではなく、身の回りの生活と結び付けて指導する等、生きていくうえで必要な力を身に付けていくなど将来を意識した視点をもって指導する。
　自己決定する力を育むにおいて、ただ注意するだけの指導ではなく、次に同じ場面があったらどうするべきか児童自身が判断できるようにする指導を心掛けて実践していきたい。そういった点で、教師は直接的な指導に加え児童に考えさせるなどの場をつくる（機会をつくる）ことも大切に考えながら指導に組み込んでいきたい。

○　本講義では、学習指導要領などの視点から教育についてのお話を聞いた。まずは、キャリア教育について述べていく。キャリア教育については、明確なビジョンを持って行っていく必要があると感じた。将来の生活をよりよくするためにどのような力がいるかというものになるがこれは、特別な事だけではなく生活面の力も非常に重要だと思う。これは、年齢を重ねれば身につくというものではない。だからこそ、学級での行動も、ただ過ごすのではなく、キャリア教育を見据えて担任が指導していく必要があると考える。
　個別最適な学びと協働的な学びのそれぞれについて理解して指導することも重要だと思った。これらは、独立して考えるのではなく一体的に行うことを重要視していきたい。学習の中で個別の活動を行う際には、そこに没頭するのではなく周りと相談できるような雰囲気づくりをしていく。協働的な学びについては、空気を読むということが足かせになっているように感じる。実際に演習に行っていると休み時間遊んでいる時でも「空気読もうや」という発言を耳にする。同調圧力をなくすということは、難しいことであるが素直に思いを打ち明けやすい環境づくりが必要になってくると思う。
　担任が意識的に目的をもって学習活動に取り組むことが必要であることが分かった。

○　私はまず教員になるうえで大切なことは逆算する力であると考える。子どもたちに中学校の間の三年間でどのようなことを伝えたいのか、どのような力を持って卒業してほしいのか逆算する力が必要であると考えた。

子どもたちは一人一人違って尊い存在であるのでその子たちを成長させるためには教員である自分も様々な経験をして多くの引き出しを持っておく必要があると思った。私は学校現場においても正解主義や、同調圧力があるように教育実践演習で学校現場に入った時にも感じている。

やはり、自分も正解を求めすぎて、周りに合わせてしまいたくなる気持ちがある。だが、子どもたちに学習の個性化を促していくためには様々なことに挑戦させて探究させていく必要がある。子どもたちに教員が敷いたレールを歩かせるのではなく、自分で自分に合った学習を子どもたち自身が発見していく必要があることを学ぶことができた。また主体的に学び続けなければならないのは子どもたちだけではない。教員も目まぐるしく変わる教育業界を前向きにとらえ、その変化に対応して、子どもたちに最適な学びの場を提供していける教員を目指す。

○　「協働的な学びの実現」は、グループでの活動で問いを立て、みんなで一緒に考えていく様子をイメージしていたが、荒瀬先生が話された、同調圧力を生み出し、みんなが仲良くやっているわけではなく、だれか無理をしているかもしれないという視点も併せ持ち、集団の中で個が埋没してしまわないように意識していく。

反対に、個別最適な学びを実現しようとする際に、孤立した学びや分断に陥らないようにするために、学習の個性化や指導の個別化をそれぞれどういうことなのかを理解する。そして、生徒自身にとって意味のある事になるよう、教師が担うべき役割、また教師が手出しすべきでない部分を吟味したうえで行動していきたい。

『教師が子供の進路や将来などを「決めてあげる」のではなく、生徒に「決めさせる」ために何をするか』というお話が最も印象的であった。この話を受けて、生徒にとってより良い道を選んで生徒に提示してあげるのではなく、まずは生徒がいろんな道を見つけられ、その中から様々な要素を受けて判断・決定することが出来る環境や、普段の学習の中で自ら決定して判断・選択をする機会を積極的に設けていこうと決めた。それが、教師が担っている役割であると考えている。

○　個別最適な学びの具体的な内容である「指導の個別化」「学習の個性化」は、授業を作る上で、とても必要な要素であると考える。そのため、授業づくりをしていく中でも、生かしていきたい。

「指導の個別化」では、児童生徒一人一人に合った、教材や指導の工夫をしていきたい。例えば、自閉症の児童生徒がいれば、その子も授業に参加できるように、その子の特性を活用した遊びを取り入れたい。

「学習の個性化」では、小学生や小学部に在籍している児童には授業として「探究」することは少ないと考える。しかし、それに繋がる力を小学校の段階で身に付けていく必要がある。そのため、単元ごとに授業を進めるときに、そのねらいを大切にして、そのねらいが達成できるために、目標設定ができるようにしていきたい。

そして、荒瀬先生の「その先に何かやりたいことがあれば、自分のしたいことがあれば、ずっと同じ職でなくてもいい」という言葉がとても心に響いた。これは、自分の人生観が変わる言葉だった。自分が何をしたいのか、選ぶ「自己決定力」と、「選ぶ幅」を広げるためにも、学びは必要なのだと改めて感じた。

第４回〔２月 22 日（水）〕教育実践講座Ⅰ
講座内容：講義「小学校における児童理解と学級経営」
講義「中学校における生徒理解と学級経営」
講義「高等学校におけると生徒理解とホームルーム経営」
講義「特別支援学校における児童生徒理解」

○　本日の講演で、確かな児童の理解は、学級経営を行う上で最も重要であることや、積極的にコミュニケーションをとることの大切さを学んだ。私は、これらの学びを以下の二つの視点から今後の演習や教員としての実践に活かしていきたい。

一つ目は、児童や先生同士のつながりである。学級は担任だけではつくりあげることはできない。担任と児童でつくりあげていくものである。そのためには、児童一人一人のことをよく見て、児童の言葉に耳を傾け、思いを受け止めていくことが大切であると学んだ。児童のことを理解するには、観察をするだけでなく、実際に児童の気持ちを聞くことが必要であると考える。それゆえ、演習を通して、児童に対して積極的にコミュニケーションをとり、一人一人の児童のことをより多くより詳しく知っていきたい。また、児童理解には先生同士のコミュニケーションも必要不可欠であると感じた。今回、ペアワークやグループワークをしてみて、自分では思いつかなかった学級経営の方法や児童の背景の考え方を知ることができた。このような意見交流、情報共有は学校現場においても大切である。他の先生方から見たその児童の様子を聞くことで、より深く一人一人の児童について知ることにもつながると考える。

二つ目は、保護者とのつながりである。家での様子は学校での様子と異なる児童も多い。言い換えれば、家庭環境が学校での過ごし方に関係している可能性は高いということになる。そのため、家での様子を保護者に聞くことで、その児童の背景を探る一つの手段にもなると考える。また、音読カードのサインのところや連絡帳などにメッセージを書いて、その児童のよいところや学校での頑張りを保護者に伝えることもしていきたい。自分の子どものことを知ろうとしてくれているなと保護者が感じることは良い関係性になると考える。これは児童理解にも必ずつながるため、保護者とのコミュニケーションも大切にしていきたい。

○　現在演習校で小学校２年生を主に担当させていただいており、児童の様子がいつもと違うときに「どうしたの？」と声をかけてもなかなか答えが出てこない場面がよくあるので、今回の講義で学ぶことができたように、気持ちの選択肢を出して一緒に児童の気持ちを整理しながら聞き出すことや、気持ちを言語化することを決して強制せずに、落ち着いてから聞くという対応をとっていこうと思った。これからは、様子が違うことに気が付いているということを児童に伝えつつ、その気持ちを聞き出すタイミングを上手に見計らうことができるように、演習中も意識していこうと思う。

児童を理解するには、児童のことをよく知ろうとするだけではなく、その保護者との連携を大切にすることが大切だということから、来年から実際に教員となった時に、小さなことからコツコツと保護者との関係を築くことで児童を深く理解することに努めたいと思った。また、児童に何か不安なことが生じたときに、担任と保護者が各々点で対応するよりも、その二者が繋がって線になって児童を受け止めてあげられるように、連絡帳などに小さな成長をコメントしてみたりして、保護者とつながり続けることを大切にできる教員になりたいと感じた。

○　私は今回の講義から、学校生活や社会生活の中で関わる全ての人との“つながり”を深めていきたい。子どもはもちろん保護者や教員、地域とのつながりを深めていくことは、よりよい学級経営を行っていく上でとても重要なことである。児童理解のためにも、人とのつながりを大切にし、演習や教員としての実践で以下の２点に取り組んでこうと考えている。

１つ目に、児童一人一人の実態を把握するための関わり合いである。日頃からのきめ細かい観察を基本として、面接などの適切な方法を用いて、一人一人の児童を客観的かつ総合的に認識し実態を把握しようと考える。そこから児童との信頼関係を築き、児童同士の人間関係を育てることでよりよい

学級経営にもつながるのだと考えている。その上で、保護者や他教員との関わりの中で児童一人一人の背景を把握することも大切である。

２つ目に、教員として質の高い専門性を高めるためにつながりを深めることである。教員の方とのコミュニケーションを直接行い、吸収しながら学ぶよう取り組んでいく。

子どもたちの主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりをするためにも、このような取り組みを行い、様々な経験を積みながら教員としての資質を高めていきたいと考えている。

○　教員はいつでも生徒に期待しながら、接していく必要があると感じた。これはいつの時代になっても人として根源的に持っている感情であると考えると、そこを一つの軸として置いておきたいと思った。

これは、生徒が何をするにしても意欲があるからと捉えるよりは、どの生徒もその根源的な意欲を発揮したり、表に出したりしていけるような環境や学びの場所をつくっていくという意識を持つという意味で考えて、それぞれの生徒に対して具体的にどのような支援がいいのかという視点を大切にしていきたい。

学習指導と生徒指導の一体化の観点からも、教員が生徒一人一人と関わっていく中でそもそも生徒理解が一番大事であるから、生徒と関わるどの場面にも関わらず、生徒を見取ることのできる機会を逃さない意識をもちたいと思った。具体的には、日常の中で当たり前に感じているような生徒の反応や事象に疑問をもち、その根元にあるものは何かを深く考えることで、生徒の理解を深め、その中での気づきを共有しながらそれを信頼関係につなげていきたい。

○　加納先生のお話を聞いて HR 経営は、「共に作り上げる」ことが大切であると受け取った。教員は、学校による学級経営計画に則りながら目の前の生徒をどのようにしていきたいか、どんな力をつけさせたいかということを考え、一年間かけて大切なことを伝えていく。この中でどんなことをルールとして徹底させたり工夫した実践を行ったりしていくのかについては、教員それぞれの色が出るものだと考える。自分が理想とする共に作り上げる HR のために行いたいことは２点ある。

１点目が役割分担と責任感である。加納先生は清掃を重要なものとして徹底するよう指導されていた。ここから実践するにあたり自分たちの役割が明確となり責任を感じられるよう HR における係活動は、よく選定する。仕事量は均等であり生徒自身にも活動の成果が還元されるようにしていく。こうすることで生徒が HR に対しての帰属意識を持つことができ、また自分たちで作っていく意識を持たせることができると考える。

２点目が重要性を話すということである。仕事が割り振られ、行わないといけない「義務」のような形では円滑に回っていかない。そのため「なぜその仕事をするのか」、「なぜこの時間が大切なのか」について年度当初に伝えることで生徒らが実感を持って仕事に励むことができると考える。

自分はどんな生徒を育て、そのためにどんな具体策を打ち出すかといったこれらのことは、今からよく考えながら学校現場での実践を参考に突き詰めていきたい。

○　今回の講座で、二つのことを今後の演習や教員として実践に活かしていきたいと考えた。一つ目は「子どもの日々の姿」を見ることである。児童生徒の基本的生活習慣はどこまで分かっているのか、コミュニケーションでも聞くことができるのか、話すことができるのかなど一人一人実態が変わってくる。一人一人をよく観察して、その子自身の分かり方を分かるようにしていきたい。また児童生徒を観察することによって何に興味関心があるのかが分かり、授業作りにつながるとともにアセスメントを基盤とした支援を行っていくことができる。二つ目は「気になる行動を大切に捉える」ことである。児童生徒の行動には一つ一つ意味があり、その行動の原因・要因を教員が理解できるようになることで児童生徒の支援や指導に繋がる。ただ単にできない、分からないではなくなぜ分からないのか、どのようにしたら分かるようになるのかと学習面だけでなく生活面でも工夫を取り入れていかなければならない。いつも授業中にこのような行動をとるから困るのではなく、なぜこのような行動をとるのか、どのようにしたら授業に工夫を持つのかと日々実践をして考えていかなければならない。この二つのことを意識して演習に取り組んでいきたい。

## 第５回　集団討論　　〔２月 27 日（月）28 日（火）３月１日（水）２日（木）３日（金）３月　６日（月）７日（火）８日（水）９日（木）〕

**講座内容：教育観・教師像等の交流**

○　集団討論を終えて、限られた時間の中で自分の考えを伝え、他の人の意見を聞き、さらに深めていくことの難しさを感じた。しかし、養成講座や演習校で得た気づきや学びを共有できたことで学びを深めることができたという実感が持てた。

第１テーマでは、子どもとの信頼関係づくりについて話し合い、児童・生徒理解に努めることの重要性を再確認できた。今後の演習では、子ども一人一人の言動や表情をよく観察し、会話や適切な距離感を意識したい。さらに信頼関係を築くために先生方が子どもや保護者、教職員間でどのような取組を行っているかを学び取りたい。

第２テーマでは自己肯定感を高めるかについて自らが自己肯定感を持って、子どもと接していきたい。京都府の掲げる教育理念について再確認することができたので、自己肯定感を土台に三つの力を養い、よりよい社会と幸福な人生を創り出せる人を育成するため自己研鑽に努めたい。

○　今回の討論を通して、京都府教育振興プランの具体的な内容を、自身の演習校での経験や実践から理解を深めることができた。包み込まれているという感覚を土台に、児童が新たな学びの一歩を踏み出せるよう、自身の経験や実践がどの力に関連付けられるのかを意識し、今後の演習に生かしていきたい。

３つの力を育むことは、社会に出てからも必要とされる力でもあり、私たちにも必要な力である。また、３つの力を相互に関連付けができるような指導を目指したい。そのために学級経営など、演習校での日々の経験や実践、先生方の取組を吸収したいと思う。この教師力養成講座を通して、３つの力も育んでいきたいと思う。

演習では、３つの力を育むために学校がされている取組や担任の先生方の取組の意図をつかみ、吸収したいと思う。３つの力がどのように関連していくのか児童の実態に即して、今後学んでいきたい。演習テーマの主体的に学習に取り組むための発問・導入がどのように３つの力に影響していくのかを学び、実践に活かしていきたいと思う。

○　今回の集団討論では、討論の内容や話題の方向性を客観的に見ることの大切さと、育てたい３つの力は相互に関係し合うことを学んだ。

その上で私は客観的に物事を見られるようにしたいと思った。これから何度も話し合いや私が授業をする場面がある。その際にねらいを明確にし、そのねらいに沿った議論ができるようにするために客観的な視点を養う。ねらいやテーマから外れそうになっていたら、自分から修正できるようにし、今何が話し合うべきことなのかを考えるようにしていく。

そしてはぐくみたい３つの力は、目指す人間像を実現するために、相互につながっていることが分かった。その中でも一人一人を取りこぼさず、見捨てないという意識を子どもに感じ取ってもらい、包み込まれているという感覚を大切にしていく。自己肯定感や包み込まれているという感覚ははぐくみたい人間像の基盤である。そのため、児童と積極的にコミュニケーションをとり、児童からこの先生は本当に自分のことを思ってくれていると思ってもらえるようにしていく。

○　今回の集団討論では、京都府の教育の基本理念をしっかり理解した上で、児童理解をすすめる必要があると考えた。主体的に学び考える力や多様な人とつながる力、新たな価値を生み出す力は前提に包み込まれているという感覚がなければならないものであると感じた。よって、今後の演習では、児童とのコミュニケーションから児童自身を読み取り（理解し）たい。例えば、休み時間の児童達と遊ぶことや授業中の机間指導から、今どのようなものを求めているのか、どのようなことに興味があるのかを知ることによって、児童の理解を深めていこうと考える。包み込まれている感覚は先生のみから児童へと与えられるものというわけではなく、児童同士や地域の方々からも与えることができるものである。よって、教師力養成講座生として演習させていただいている私も児童に包み込まれている感覚を与えることができる立場にある。児童達に影響を与えることができる距離に自身がいることを自覚し、今後の演習に挑みたい。

　児童理解は、授業や学級活動など全ての時間にすすめることができるものである。そのため、全ての時間に児童を理解することに努めたいと考える。

○　今回の集団討論は、これまでに自分自身が経験してきたことを言語化する良い機会でした。学校での気づきはメモに残すようにしてきたが、気づきを他者と共有することはありませんでした。そのため、最初は省察ができず、メンバーと話を交えることも難しかったです。しかし、テーマに適した考え方や話し方を教えていただいたことで、共同省察やテーマの意図を読み取ることができるようになった。共同省察によって自分一人では得られなかった多角的、多面的なものの見方を養うことができた。京都府の教育理念の内容理解が進み、学習指導要領の意図も組み込まれていることを知ることもできた。今後の演習では学校での気づきを理念と結びつけてより深い理解となるよう努力したい。

○　二つのテーマで話し合ったことを通して、養成講座での経験をその都度整理しながらまとめ、京都府の教育の基本理念を意識しながら生徒とコミュニケーションを図っていきたい。

　講座や演習で得られた経験は多いものの、振り返りを行わなければやりっぱなしになってしまう。京都府の教育の概念図を三次元で捉えると円錐形となり、全てがつながっているということに改めて気づかされた。自分が講座で得られた発見や演習で見た現場の先生の取組が基本理念にどのように関連しているかを考え、自分が何を軸にして子どもと向き合うかを考えていきたい。

○　今回の集団討論で、話し方を学び、話し合うことで考え方が広がった。まず、話し方については、指導担当の先生と話す際に生かしていきたい。私は話の要点がまとまらないままに話すことが多かったので、相手の意図を理解し、要点をまとめて話すことを心がけたい。次に子ども同士で認め合うことを取り入れた授業づくりを行う。特別支援学校で先生と子どもとの間で認め合うことは、実感していたが、子ども同士の認め合う取組を聞かれてその答えがなかったことに気がついた。先生と子どもとのやりとりだけでなく、子ども同士が認め合う活動を取り入れたい。そして、京都府の教育理念について理解が深まったので、講義や演習がどのようにつながっているかの視点を持ち、自己肯定感を育てることがどのような子どもの育成につながっているかを学んでいきたい。

第６回〔３月３日（金）〕教育実践講座Ⅱ
講座内容：講義・模擬授業「授業実践講座」（小学校国語　算数
中学校高等学校　国語　社会・地歴公民　数学・理科　外国語　特別支援学校）

○　授業を実践する中で、自分の軸をもつことを今後意識したいと思った。堀川先生が今回の授業のテーマとして「子どもの声でつくる」を軸にしておられたように、何か一つ自分の中で大切にしたいことをもっておくことは、めあての決定や活動の選択で必ず役に立つ。
　また、めあてを決める時には、児童にとって大切になってくる気づきや発見の機会を奪わないめあてを考える必要があると感じた。よく、「10 をつくって計算しよう」などというめあてがあるが、これでは 10 をつくる、という児童自身の発見の機会がなくなってしまう。今後、授業を実践するためには児童が主体的に学べるようなめあてをつくるようにしたい。
　そのためにも、まずは児童の声を聞くことを大切にしたい。教員が指導案の作成時に、ある程度のめあてを考えることは必要になってくるが、授業の中で児童から出た疑問をめあてにする余裕をつくっていきたい。「～しよう」と呼びかける文末のめあてではなく、「～する」というようにあくまでも児童が主語になっているめあてが理想だと思う。さらに、めあてはその授業の見通しや身につけたい力を示すものでもあるため、パワーポイントを使う授業であってもめあては板書にし、常に児童の目に止まる場所に書いておく必要があるだろう。そうすることで、授業の中で、児童は何をするべきなのか、目的意識をもって活動に参加することに繋がっていくだろう。
　最後に、私は 45 分の授業の中で児童を主役にできる授業を目指したいと思った。児童にとってはかけがえのない１時間の授業である。そのため、授業の１回１回を大切にし、児童にとってこの１時間の授業を受けたことでなにか一つでもできるようになったことが生まれるよう、“児童を主体にした授業づくり”を学び続けていきたいと考えている。

○　模擬授業を踏まえて指導していただいたため、「個別最適な学び」「主体的・対話的で深い学び」、「協働的な学び」と３つの学びについて、自分の中で具体性が増し関連付けて考えられるようになった。
　特に印象的だったのが、全体に向けて軽く説明し、できる児童には自分で学習させ、できない児童には前に来るよう呼びかけ、再度詳しく説明する事で一人一人の学習進度に合わせた学習を行っていた事である。その後もわからない人は手を挙げたり、個別に指導したりする事で、一人一人が置いていかれない授業を展開していた。これが個別最適な学びであると理解した。個別最適な学びについては、授業でどのように展開すると良いのか、具体的な方策がわからなかった点があるので、とても参考になった。
　また、一人一人が内容を理解した上で、ロイロノートを使用して自分の考えを書き、全体で共有する事で、他者と意見交換しやすく、新しい発見に気づきながら子供達は学びを深めていけると思った。
　今回の学びから、演習で授業を考える際には、３つの学びを実現できるよう今日学んだ事を参考にして取り入れたい。日頃から演習で授業を参観する際に、自分が教員であればどのように展開するか、３つの学びに焦点を当てながら考え、方策を増やしていけるよう努めていこうと思った。また、ICT の活用の仕方に関しても、ICT を使用する事で児童の考え方を全体に共有でき、自分で興味のある意見の所まで聞きに行ったり、グループを作ったりして、様々な形で興味や関心を深めながら授業をできると思った。ICT を使用しながら授業を展開できるよう、今日の学びを活かしていきたいと考える。

○　今日の学習を踏まえ、一つ一つの授業で目標をもつことを、今後意識して実践していく。毎日５、６時間、週５日授業を行う教員はすべての授業で十分な準備を行うことは現実的に不可能であるという話を演習校でも耳にした。それでも、最低限この授業で教えたいのは何なのか、身につけさせたい力は何なのかをしっかりと授業前に確認してその目標にあった授業を行うことを今後の私の実践テーマに設定する。私は先週の道徳の体験授業で授業の終末段階が上手くいかなかった。この講義を受けた今、その失敗の原因は授業の目標を意識しておらず、道徳ではなく指導になってしまっていた点であると理解できた。失敗から学んで目的意識を持った授業計画と目標を達成するためのまとめを設定

していきたい。
　また、個別指導での援助や助言が主体的な学習の妨げになっていないのかという不安をもっていた私の質問にはその授業の目標がどこなのか再確認し、どこまで援助してどこを自分で考えさせるかは目標に沿って定めればよいという教えをいただいた。遅れを取り戻させようと焦って援助しすぎることも、児童にゆだねすぎて学びに追いつけないこともどちらも避けねばならないということだった。このように個別の指導の観点で見ても、目標をしっかり持った授業を行うことは重要であった。明日の演習からどんどん活用していく。また、正しい目標を設定できるように学習指導要領を再度読み込むことも怠らずに行っていく。

○　私は今回の講義で、特に子どもの声を大切にして授業が作られることと、授業の組み立て方について学んだ。
　１つ目については、子どものつぶやきを拾い、わからない子どもが自分でわかるようになる楽しさを味わうことができる大切さを学んだ。私は、わからない子どもがわからないと意思表示できるように、２回目の体験授業は道徳を予定しているので、その際に意識していきたい。
　２つ目については、子どもにこの授業で何を学ばせたいかといったゴールを最初にイメージすることを学んだ。また、子どもの思考を整理することで、子どもの声をどのように授業に生かすかを意識していきたい。今後の教員としては、指導案はマニュアルや時間通りに終わることよりも子どもが意思表示できるように明るい雰囲気をつくり、子どもがわからないままで終わることのない授業づくりを心がけていきたい。

○　生徒にとって、何を用いて説明することで理解が容易くなるのか、生徒目線に立って考え、教材研究を進めていくことがとても大切であると考えた。特に、中学校の数学科においては、小学校の算数とは違い、視覚的に捉えさせることで、イメージがつきやすく、理解を深めやすいと教わった。実際、中学校の現場において、スライドや、グラフや表などに値を入れることで、自由に変化できる、表現できるサイトなどを用いて、視覚的に捉えさせながら、授業を進めておられる先生方が、とても多いと感じた。自分達が生徒だった時よりも、より具現化されたイメージを持って、問題へと取り組むことができると感じた。

○　今回は理論を基に実践した授業を体験することができた。その中で教科書を一から十まで完璧に教えなくても良いと講義を受けたことはとても励ましになった。しかし授業で取り扱う知識を軽視しても良いというわけではないことを肝に銘じておく必要もあると思った。
　具体的な授業の内容についても学習指導要領を参考に組み立てると一貫性のある授業が作れる。この点で授業を作り実行していく際に、立ち返られるものとして学習指導要領があると学んだ。
　また、実際の授業での講義が生徒のためではなく、教員のためになっていないかという問いかけはとても共感できるものであった。授業は教員にも生徒にも意味のあるものにしなければならないと私は思う。それは講義やグループ・ペア活動などを有意義なものにする必要があるということだ。つまりは教員のための時間稼ぎでの講義や、ただの形式上の活動は生徒のためにならない。このように今回の講座で受けた問いかけによって私は自分の考えをより具体化することができた。

○　今回の講義を通して、特別支援学校の教員を目指す上での心得や大切にするべきものについて改めて学習することができた。講師の方への質問で生徒との距離感の難しさが印象に残った。実際に関わるうえでも、発達年齢に合わせたかかわり方をしてしまったり、自閉傾向にあり目線が合いにくかったりする生徒に対して、距離感が近くなってしまう場合があり、障害のある児童生徒との距離感の保ち方について難しく感じることが多くあった。このような私たちの質問に対して、先生方は、児童生徒との距離感に関して、正解はなく、悩む内容の一つであるが、先生方の回答で印象に残っているのが、児童生徒とかかわるうえで客観的な視点を失ってはいけないという言葉である。決めつけるのではなくて、一度、児童生徒との距離感を客観的に見る視点を持ち、実年齢、発達年齢どちらにも視点を置いたかかわり方をするため、客観的な視点を持つようにすることを意識していきたい。

第７回〔３月８日（水）〕教育実践講座Ⅲ
講座内容：講義「小学校における外国語教育」
講義「中学校における生徒指導事例と対応」
講義「高等学校における生徒指導事例と対応」
講義「特別支援学校における医療的ケアへの対応

○　今日の谷内先生の講義を受けて、英語の授業だけに関わらず、他の教科にも大切なことを学んだ。外国語教育は三年生から始まる科目で、三年生から六年生と系統性を踏まえた指導を大切にすることを学んだ。これは英語の科目だけではなく他の科目でもいえると思う。だから、今後の演習で授業をさせていただく機会一つ一つを大切にし、その中で、この単元ではどのような力を身につけて、学年が上がるとどこの単元に繋がるのかを考えて授業の計画を立てていきたい。

二つ目は、能動的な子どもを育んでいきたい。人は褒められた方向に伸びるということを学んだ。今後の演習や教員としての実践で、授業をしてノートやワークシートに振り返りを書かせ、集める際には一人一人にコメントを書くなどして、能動的な子どもを育む授業にしていきたい。

三つ目は、この活動のねらい、目標を明確にし、この活動のゴールのイメージをもたせることが大切ということを学んだ。この活動でどんな力を身につけて欲しいかを確認することで、子どもたちは何のために活動しているのかがわかる。自分が授業をするときにも子どもたちに活動のゴールのイメージをもたせることを大切にしていきたい。この三つを自分が実際に授業をするときに活かしていきたいと考える。

○　英語好きを育てたいという思いがとても伝わってくる講義だった。導入で児童の心をつかみ、英語を話してみたい、さらに知りたい、やってみたいという思いを見逃さないという心掛けが大切だということが分かった。また、授業をする上では学級経営がかなり影響してくるということも言及されており、授業以外のところでも児童のことをよく理解しておく必要があると改めて感じた。様々な学級状況の中でも、創意工夫を凝らして英語に触れさせている様子を見ることができ、参考にしたい点をたくさん見つけることができた。例えば、身近なコンビニの絵を用いてクイズをしたり、家庭科や算数と結びつけた教科横断的な学びがあったりしたが、そういった工夫から、児童が英語は楽しい、英語があれば生活も豊かになると自分で感じることができ、より主体的な学びへと繋がっていくのだと思った。

今後の演習では、外国語の授業をさせていただくので、児童が英語に親しめるよう、体を使ったアクティビティや身近なものに結びつけて気づきを得させるなど、体験的な活動を取り入れていきたい。また、国際理解教育の観点からも、世界に目を向けた授業を心がけ、広い視野を持った児童を育むことができるようにしたい。

○　導入の大切さについて、考えさせられる講座であった。特に、英語の専科の方であったため、「勝負の導入」とされていた。ファミリーマートの色を答えさせる、ローソンの絵文字のマークの下は何かなど、惹き付けられるような授業でした。自主勉ネタなど、考えられて発問しているのも学習意欲を掻き立てられるような内容だった。私も今後の演習や教員になった時、導入を勝負の気持ちを持って挑みたいと思う。受動から能動にするために子どもの心をつかむような導入にする大切さが今回の講義で身に染みてわかった。私自身も体験しましたが、ダンベルや靴などを計算する問題である。その問題では、惹き付けられる要素がたくさんあった。最初は先生の話を聞いていただけであったが、前のめりに参加するようになった。このように受動から能動になる授業は意欲が増すことがわかった。前のめりに授業に入り込めるような導入を今後していきたい。英語の教室も工夫されていて良いと思った。季節に合わせて、英語の部屋を変えたり、ゲームが出来るようにしたり、英語に慣れ親し

みやすく、英語に抵抗感を抱く子どもが少なくなるような取り組みがおおいにされていた。私も英語は苦手意識があったため、そのような子どもたちがなくなるようにしていきたいと思う。教室環境まで工夫されているのが分かり、環境が大事であることもわかった。担任になったら、教室環境も考えていきたいと感じた。

○　生徒指導提要が昨年 12 月に改訂され、新たに加わった「安心・安全な風土の醸成」は、生徒一人一人の個性が認められ、安心で過ごすことができる学校づくりが重要であり、浅野先生の講義で大きく二つのことを学ぶことができた。

一つ目は、生徒指導とは、事象のみを指導するのではなく、そのような事象を起こしてしまった生徒の背景や内面に迫っていくものであることだ。講義内のグループワークで、遅刻する生徒にどのような指導を行うか議論した。まずは、生徒の意見を尊重してからどのような背景が隠されているのかなど、生徒の内面に迫っていき、他の先生方や管理職、保護者、場合によっては他機関と連携を行って支援していく事が大切であると考えられた。

二つ目は、表面上だけで指導するのでなく、悪いことを行った生徒には「あなたが悪い」と伝えた後に、支援を行うことが大切であることだ。このことで、生徒は「自分のことをよく見てくれている」、「自分のことを大切に思って指導してくれている」と伝わり、生徒の内面に迫ることができると考えられた。

○　本日は高等学校における生徒指導について教えていただきました。改訂生徒指導提要のポイントやいじめ問題に関して、時事的な事項を踏まえつつ学ぶことができました。特に成人年齢が 18 歳へ引き下げられ、高校３年生のクラスに成人を迎えた生徒とそうでない生徒が入り混じるという状況がこれからの高等学校には起こってくるので、その点への配慮も必要だと感じました。

また、生徒指導提要が改訂されたことによって新たに「発達支持的生徒指導」の考え方が提示され、日常的な人権学習やＨＲでのいじめを防ぐ環境づくりが大切だと学びました。また、後半の事例研究ではより実践に近い経験をさせていただきました。いじめ問題へ対応していくためには様々な視点をもちながら、決して一人で解決しようとせず、複数の先生方と協力していくことが大切だと学びました。生徒への聞き取りにはタイミングも重要だと学びました。加害者だと見なされている生徒に初めて問題について聞こうとした場合、そのタイミングや聞き方を間違えてしまうともう二度と話してくれなくなるかもしれない、という先生のお話が非常になるほどと思いました。いじめ問題は慎重に、あらゆる生徒の思いを想像しながら取り組んでいきたいです。

○　今回の講義を通して、医療的ケアを教師が行うことの意義について考える機会になった。実際に特別支援学校の教員を目指す中で、知識的に医療的ケアが必要な児童生徒の存在やどのようなことをしているかなどを学習していたが、ここまで具体的に考える機会はなかった。そのため、医療的ケアが必要な児童生徒とかかわる教師の方に対して様々な疑問があった。他の児童生徒に比べて、表情や行動が見えにくく生徒の意思や思考を読み取りにくい分どのようにして関わっているのかや初めて会ったとき何から始めるのかなどである。

実際に、看護師の方がいて医療的な部分を担うことが多いかもしれないが、「医療的ケアを教師が行う意義」について問われたときに、その子のすべてを知ろうとすることが教師としての姿勢であり、そこから、子どもたちの教育について考えていく必要があるというふうに感じた。そのため、医療的ケアが必要な児童生徒に関しても、教師ができる医療的なケアは教師が担うことで見えてくる生徒の姿やその行為を通した生徒との関係が築いていけると感じた。これは、すべての子どもとかかわる教師にいえることであると感じた。そのため、実際に子どもとかかわる際には、すべてを知ろうとする姿勢を忘れずに教育や支援について考えていきたいと思う。

## 第８回〔３月 15 日（水）〕教育実践講座Ⅳ
## 講座内容：講義・演習「特別の教科　道徳」

○　講義の内容を踏まえ、今後の演習や実践に向けて、以下のように活かしていく。

まず、日頃から子どもとたくさん関わり、子どもの行動や心をしっかり見ていく。子どもの行動・心をよく見ることは道徳教育の基本であるというお話を受け、まさにその通りだと思った。道徳教育というと、何やら難しいもののように感じるが、道徳的価値は子どもの身近な生活の中にも転がっていることが多い。したがって、道徳での学びは、道徳の授業の中で完結するものではなく、子どもの身近な生活と密接につながっていることを絶えず意識していきたい。そのうえで、子どもの身近な生活に目を向け、その中から道徳的価値を見出し、授業に活用していきたい。子どもと関わる中で起こる様々な出来事を、子どもの負担にならない程度で道徳の授業に活かすことは、子どもが道徳を学ぶ必然性を生み、学習意欲を促すと思う。

次に、日頃の授業や学級経営を通して、子どもが安心して意見を言いやすい雰囲気をつくっていく。中舎先生がおっしゃるように、道徳とは、みんなで思ったことを出し合って心を磨き合っていくことである。したがって、子どもが思ったことを言いやすいように、日頃から肯定的な声掛けや励ましを心がけていく。また、声掛けだけでなく、にこやかな表情やうなずき、相槌をどんどん取り入れていきたい。

そして、子どもの言葉を生かした授業をしていく。演習校の指導教員からよく指摘されることだが、教師はつい子どもの意見をまとめようとしたり、結論を出そうとして話をすぼめたりしがちである。だが、道徳とは、色んな子どもの意見が出されてこそ、学びが深まっていく教科であると思う。したがって、教師は子どもをもっと信頼して、子どものつぶやきや意見を促していきたい。そのためにも、教師が話す言葉をできる限りとどめるよう意識し、「〇〇さんはこう言っているけど、みんなはどう思う？？」といったように、子どもの言葉を積み重ね、つなげながら授業を進めて行くよう心掛けていきたい。

私は３回目の研究授業が道徳であるため、今回の講演がとても参考になり、充実した学びとなった。

○　今回の講座を通して、道徳教育について大きく二つ学ぶことができた。一つ目は、道徳教育における心の働きについて、二つ目は、道徳の授業づくりについてである。

一つ目の道徳教育における心の働きについては、道徳教育により何を学び、どのような価値を身につけるのかを考えやすくなった。道徳教育は、みんなで思ったことを出し合って「心」を磨き合うという。これは、心の働きである道徳性を良くすることによって、ありとあらゆる場合に主体的に判断し、行動するために必要であることが分かった。これにより、今までは身につけたい道徳的価値をどのようにしてつけていけばよいのか明確に答えを出すことができていなかったが、授業を行ううえで子どもたちの考えを多く出し合わせ、心を磨き合わせていこうと考えた。

二つ目の道徳の授業づくりについては、一つ目のことを実践していくうえで重要なことである。みんなで思ったことを出し合うにも教室内の雰囲気が良くなければ素直な考えや意見が出しづらい。そのため、普段の学級経営にも言えることだが、授業内だけでいうと導入の段階で自分の考えや意見を言いやすい雰囲気づくりをすることが大切である。また、身につけたい道徳的価値をまずは教師が理解するために教材を読み込み、描かれている道徳的価値の展開を読み取ることも重要である。授業の準備をしっかりと行い、中心発問をどこで組み込むかなどを考え、児童たちが発言しやすい雰囲気づくりをしていこうと考える。

以上のことから、道徳教育における心の働きについてと道徳の授業づくりについて学んだことを自分が道徳の授業を行うときだけでなく、日々の学級経営から活かしていこと考える。

○　今回の講義では、次の三つのことを活かしていきたいと考えている。

一つ目は、時と場に応じて児童が主体的に判断して行動できるような授業にすることである。この

ような授業にすることは、深く考えた授業や児童が自分の気持ちに正直になれた時に教材を通して考えることが可能になると考えているため、考えやすく深く考えられるような授業作りをしていきたい。

二つ目は、国語と道徳の違いである。教材が物語のようなものが多いため、つい筆者が言おうとしている事等に目を向けがちであるが、道徳科は気持ちの変化を捉えることであるため、変化する前後で気持ちの変わりをはっきりさせてこれからの気持ちや行動に表せられるように繋げていく事を軸として授業していきたい。

三つ目は、導入部分で今の自分の心の気持ちを発表させたり考えさせたりして気持ちの変化を視覚でわかるようにすることである。今回はホワイトボードに書き、視覚的にわかっていたが、実際にはワークシートに書くと視覚的に気持ちの変化がわかるようなると考えて、実践していきたい。

○　道徳科は小・中学校では、担任がするためにどの教科の専門であっても授業ができなければならない。道徳教育とは生徒の人間力を高めるものであり、生徒指導と似ている部分が多いと思っていた。しかし、生徒指導は外面的なことから内面につなげていくという、起こってから正すというような感じであるが、道徳教育は内面から外面へと発展させていくという面で、真逆な性質があることに気づけた。教員になり、このような本質的な意味を理解したうえで道徳の授業を考えていきたい。そして、内容項目は中学校では、22 個存在するので、教材に合った内容項目をしっかり考えていきたい。そして、中舎先生がおっしゃっていた教師の授業時での在り方は、教壇の上で授業をずっとするのではなく、時々机間指導なども行い、生徒の中に教師が入っていけるような授業づくりを心掛けていきたい。そうすることで、授業中に生徒も容易に発言や話し合いをするようになり、授業の雰囲気はより一層よくなっていくと考えられる。

○　今回の講義では、道徳教育を通じて、児童・生徒が自分の心を言葉で表すためにどのように指導すべきかを学んだ。これを今後の演習において、生徒の意見を聞き出す発問をする際に活かしていきたい。

高等学校では、道徳を教科として取扱うことがないため、教科指導や生活指導など学校生活全体で、道徳教育を行う必要がある。例えば、私の演習校では、とある先生が教科指導において、一人の生徒に対して、２、３回の頻度で発問を行っていた。私が授業後にその発問の意味を先生に伺うと、「いろんな質問を投げかけ、いろんな言葉を発言させることで、生徒の思考を深めようとしている」と仰っていた。このことは、中舎先生が仰っていた「意見しやすい雰囲気作り」に繋がると思った。このことから、道徳教育における発問の意図や授業における雰囲気作りは一般の教科指導にも通ずる物があると実感した。道徳における「こころをこころで磨き合う」ことは教科指導における「学びを学びで深め合う」ことと類似すると思える。

以上の様な道徳教育の指導法を、私の研究授業における発問や生徒の深い思考を促すスキルとして活用していく。そして、生徒の見えないこころに寄り添い、生徒同士のこころの磨き合いを促すことができる教員になる。

○　特別支援学校で道徳の教材を必ず使う機会というのはあまりないかもしれないが、教員の数が比較的多く、児童・生徒の数が限られた教室内では、日々過ごしている生活が道徳教育にあたるのではないかと感じた。例えば演習を通して、中々相手の気持ちを読み取ることが苦手な子も、教室内の友達に対しては、自分の気持ちにどこかで折り合いをつけて過ごしているように感じてきた。また、子どもたち自身で悩み、失敗を繰り返しながら、生活がより豊かになる方向へ向かっているのだと感じた。私が教員になった際は、彼らの教室内での経験を大切にしていきながら関わっていきたいと強く感じた。

しかし、児童・生徒が手本とするのは、友達はもちろん、教員も同じであると感じる。実際、私も小・中学生の頃は先生のことをよく見ていた。

そのため、学校内ではもちろん、自分自身も日頃から他者の気持ちに寄り添ったり、深く考えたりしながら過ごしていこうと思った。子どもたちに道徳性を伝える身として、自分自身も行動をよく振り返り、子どもたちの考えや行動の基となれるようす過ごしていこうと思う。

第９回〔４月 19 日（水）〕教育講座Ⅰ
講座内容：講義「京都府における人権教育」

○　今日の講義で最も印象に残っているのは、教師が人権教育の担い手であり、常にそのことを意識しておくべきだということである。人権尊重を基盤とした教育を行っている京都府の教員として、私が実践していきたいのは以下の２点である。
　１つ目は、安心で居心地の良い学級づくりである。いじめや不登校が起きる原因の１つとして教師と児童の信頼関係がうまく構築できていないことがある。教師は常に児童の心に寄り添い、話を聞き、受け入れる姿勢を示すことで児童が安心して過ごせる学級をつくりたい。
　２つ目として、「隠れたカリキュラム」を大切に学級づくりや学校づくりを行いたい。道徳や授業としての人権教育だけでなく、班活動や掃除の時間などで児童が自ら学び取れる活動を全力でサポートする。例えば係活動や一人一役の活動でまわりの人に感謝する場面を設けるなど意図的な工夫ができる。
　以上の安心感のある学級づくりが「包み込まれているという感覚」につながり、かくれたカリキュラムが自己肯定感や主体的に行動できる児童の姿につながる。教員として人権の意識を常にもち続け児童に接していく覚悟である。

○　今回の三木先生の講義を聞き、人権教育に対する自分の考えを見つめ直すことができた。そして、今後に活かしていきたいと考えていることが二つある。
　一つ目は「人権は意識して守っていかなければならない」ということだ。今までは、人権週間など学校として考える期間のみ考えていたが、日々の生活の中で人権を自然と意識させることが大切なのだと学んだ。人権教育はあらゆる教育活動の基盤であるため、日々意識することで良い方向に変わっていくと考える。
　二つ目は、「改善された事実を知るだけでなく、なぜ改善されてきたかという経緯を学ぶこと」だ。京都府は様々な問題をかかえながらも、差別と貧困の連鎖を断ち切るために、教育に力を入れ、今の人権教育に至ることを学ぶことができた。その改善された経緯を学ぶことで、自分自身の人権教育についての知識や考え方を深め、広い視野を持ち、児童たちと一緒に人権について深められると考えた。
　以上のように今日学んだことを活かし、高い意識をもって人権教育と向き合える教員になりたい。

○　今回の講座を受講し、人権教育について私は以下の二点を実践に活かす。
　一点目は、人権教育は知識だけではないということだ。いじめをしてはいけないという知識は、誰もがもっている。それがいかに様々な場面で具体的な態度や行動に現れるかが大切だ。そのため、私は日常的に人権教育について学級で話をする。例えば、いじめ解消に向けて、学級でいじめは絶対に許されないことを伝え、具体的にどのようなものがいじめになるかといったところまで共有する。これらの具体的な考え方や行動を指導していきたい。
　二点目は、自身の人権教育に対する意識の変化である。人権教育をする上で自分自身がどれだけ知識として理解し、行動に現せているかが大切である。そのため、正しい人権教育の知識を身につけると共に、京都府での人権教育は何を求めているかというところまで考えて教育していきたい。また、日常的に児童とコミュニケーションを取ることや個別面談などを通して得る人権教育につながる「気づき」も、様々な教育課題の改善につなげていきたい。
　このような実践を行いながら、子どもたちをめぐる人権問題について、より深く知っていきたい。

○　今回の講義では、「人権教育」において教員としての取組、学校全体としての取組について学んだ。講義にあった「人権感覚チェックリスト」に記載されていることを今後の演習や教員として

の実践に生かしていきたい。今すぐに始められることは、児童生徒を呼ぶ際には必ず「～さん」と言うことや児童生徒を傷つけないように常に自分の発言に注意することを行いたい。このような些細なことから人権教育を行っていきたい。

「正しいことを正しく伝える」という教えがとても印象に残っている。児童からの問いに対して答えられなかった経験は少なからずある。はっきり答えずうやむやな答え方をしてしまったが、今後は分からないことははっきり分からないと伝え、すぐ調べて答えたいと思う。

「平等」と「公平」についても理解が深まった。学力差を公平な支援（個に応じた指導）を行うことで誰一人取り残さない学習支援を実現できるようにしていきたい。

○　私が今回の講義を通じて大切であると感じたことは２つである。

１つ目は、自身の人権意識を高めることである。京都府の教育の基本理念として「包み込まれている感覚」を全ての教育に関わる者に大切にして欲しいという願いを掲げている。これは人権意識を高く持つために最も必要な事であると考える。また教科指導を行う上では高い専門性が求められる。このことは人権教育においても同様である。児童生徒の人権意識を高める指導をするためには、人権について正しく理解し、正しく伝えるための知識が必要となる。

２つ目に大切だと感じたことは、人権問題を自分自身の課題と捉えることである。課題解決に向けては、普遍的な視点のアプローチと個別的な視点のアプローチがあり、常に解決に向け何をしなければ成らないかを考え続けていこうと思う。

私は教員となって生徒たちに人権意識を高める指導ができるよう人権問題を正しく理解し、子どもたち一人一人が安全に安心して生活できる学校を他の先生方と協力して創りあげていきたい。

○　今日の講義を踏まえて、人権学習だけが人権教育でなく、あらゆる指導や教育活動が人権教育であることを学ぶことができた。そこで私は教員が高い人権意識や人権感覚を持ち、日々の指導に生かすことが最も重要だと考える。その理由は教員が人権への高い意識を持ち、行動に示すことで生徒の人権意識を高める事につながるからである。また、教員が十分な知識をもち行動することで個に応じた指導の充実や生徒の自己肯定感の向上、包み込まれているという感覚につながると考えるためである。

具体的に教員としての人権感覚を磨くためには、書籍や映画で知識を得たいと考える。それを踏まえ、日常生活の中での偏見や差別に気づき、より理解を深めていきたい。そして正しい知識を正しく生徒に伝えていきたい。

また教員自身が人権意識を高めた上で、個性を認め、尊重し合う学級づくりや学校づくりに努めたい。

○　今回の講義を通して、生かしていきたいことは、２つある。

１つ目は、正しいことを正しく伝えることである。このことは、情報をうのみにして人に伝えてしまうと正しくないことが広まる危険性がある。また、自分の発言には、責任を持つということも大事になると考える。なので、教員になった時に生徒の前で話をする際にも聞いたことを言うのではなく、一度自分で調べてから生徒に伝えるなど、自分が理解をしてから、話をするようにする。

２つ目は、常に人権教育につながることを言い続けることである。突然いじめの話をしても生徒の心には響かない。だからこそ、毎日少しずつでも人権に関わる話を続けることで生徒が考え始めると思う。こうした話をするためには、正しい情報や深い知識が必要だと思うので、教員になる前から自分の考えを持ち、正しいことを伝えられるようになりたい。

第 10 回〔４月 26 日（水）〕教育講座Ⅱ
講座内容：講義「学習指導要領に対応した学習評価」

○　今回学んだ「学びの深まりを生むためには、子どもたちの見方・考え方の成長が必須である」という考え方を大切にしたい。この考え方から、子どもたちの見方・考え方の成長を支える手立てを作っていくのは「私たち」であることも感じ取った。私は見方や考え方を育んでいくために、感覚で進んでいく思考とそのための問題、そこから広がるもっとやってみたいという気持ちの三つが合わさった、学びの始まりをつくりたい。

学びの始まりはどこにでも、いつでもあると演習から感じる。しかし新幹線の座席配置に関する問いはこれまでと違った学びの始まりを感じた。頭の中で考えが勝手に始まり広がった。反射に近い感覚の中で、生活と算数がつながり、考えや見方を広げた。もっとやりたいという気持ちでいっぱいになった。

しかし生活を学びに持ち込むためには、気づく感性やレンズが必要になる。私にとってそこが難しいところでもあり、乗り越えたい部分でもある。平山先生も講義後、そんなプロの感覚を若手に伝えるためにも言語化したいと話されていた。そのことから私が生活と学びを結ぶための「見方・考え方」を養う方法は「子どもたちを揺さぶる」アンテナを授業で子どもたちと先生の姿から強めることだと考えた。

演習中、授業に参加しながら、子どもの目線や発言、机間巡視を通して子どもたちの頭の中を見取りながら、現場の先生の「揺さぶり」と自分ならどうするかという意識をもって授業に臨んでいく。揺さぶるために日常と結びつける力、物事に例える力や子どもを見取る力、その感性を今後の演習で磨き続けていく。

○　私は今回の講義を通して以下の二点を学ぶことができた。

１　児童の振り返りから学びを見取り評価を行う

授業から学んだことを吸収することができているか、次につなげられるようにできているのかを一番見取りやすいのは児童の振り返りである。文章の量だけで学びを評価するのではなく、はじめの考えからどのように考え方が変わり、今後はどのようなことに気を付けていきたいかなど、児童自身が学びを具体化することができているのかを見て評価しなければいけないということを学んだ。私はこの学びを演習や教員としての実践で、児童の目線での振り返りも含めて児童の成長や今後につながる評価をするという点で活かしていきたい。

２　間違いを恐れない雰囲気作りは日頃の接し方から

授業の中で、児童の考えが多くあるからこそ児童同士の学び合いがあり理解が深まるようになるため、教師は間違いを恐れない・間違いを笑わないなどの学級の雰囲気作りを徹底しなければいけない。その中で、教師は自分の失敗談を話すようにしたり、間違いを授業内で活用するときは児童に「みんなのためにこれを使いたい」などの声をかけたりしてケアをしなければいけないということを学んだ。私はこの学びを演習や教員としての実践で、普段の学級経営から授業の充実度につなげるという点で活かしていきたい。

○　私は今回の講義を受けて、教育を人が行う必要性について考えることができたと考える。ICT の導入が進む中で、「指導と評価の一体化」を行う必要性を提言されているが、その場の児童に合わせて指導を変化させたり、授業を行う姿勢から学習意欲を掻き立てたりするためには、人が教育を行う必要があると考えた。今回の学びを活かす具体例を２点に分けて述べる。

１点目は、「指導と評価の一体化」という視点から、授業を行うことである。学習評価を行う時には、３つの視点から評価を行うとされており、評価を行うためには授業の中で指導の仕掛けを行う必要がある。そのために、ヒントカードや今日のポイントを児童自身が見つけるなど、評価が変わったことに伴って授業を変化させていきたい。

２点目は、「何のために学ぶのか」を児童に理解させる授業を行うことである。数学・理科の学習に対する生徒の意識の調査結果から、日常生活に役立つとは思っているが、学ぶことは楽しいと思っている生徒は少ないということが分かった。この背景からキャリア教育が生まれたが、日常生活に役立つということを生徒自身が感じるために、各教科の本質的な意義を明確にした授業

を心がけたい。
　以上の２点から、教育を行うのは人でなければ児童のその場の反応に瞬時に反応したり、授業の面白さを伝えることができなかったりする。今後の実習や教員として授業を行う中で、児童の学ぶ意欲を引き出す指導の仕掛けを児童に合わせて考えていきたい。

○　今回の講義から、学習指導要領がなぜ改訂されたのか、その背景として必要とされている力、学習指導要領の見方など様々な視点が得られました。また、学習指導要領の中身の説明だけではなく、そこから派生し、評価の仕方、ある力をつけさせるための授業の工夫などの実践的なことも学ぶことが出来ました。
　このことを踏まえ、私が教員になった際は見方・考え方を工夫し、生徒に伝える活動に活かしていきたいと考えます。具体的には、日頃から、発言を恥ずかしがらない、失敗を恐れないようにするために、自身の失敗を話すなど誰にでも失敗はあるという認識を生徒に付けさせます。そして授業の終わりに、内容で大切であったポイントを生徒に発言させます。これにより振り返りをさせるとともに、生徒の集中を持続させ、見方・考え方をつけるための土台を作ります。最後にそれを用いて様々な物に応用できる発問を用意することで、見方・考え方をつけ、深い学びを進めていきます。

○　今回の講座で大きく二つのことを学んだ。一つ目は生徒たちが主体となって活発な授業を成立させるには、クラスの雰囲気作りが重要であるという事。二つ目は色々な対話的な授業の形が考えられるという事だ。
　高校で演習をさせていただいている中で主体的で対話的な授業を作ろうと意識しても、生徒たちがなかなか積極的に発表を行わないという現実に向き合うこととなる。その結果、教師が指名していく形態に落ち着いてしまう。教師が求めているものとは違うことを皆の前で言う事への抵抗を払拭するためには担任を持っているクラスであれば普段のホームルームの時間、授業担当だけのクラスであれば授業以外の隙間時間での関りの中で教師と生徒の間だけではなく、生徒同士の関係性も良くしていくことが必要であると思うので、この学びを活かして演習でも授業時間外での生徒との関わりをもっと重視していきたいと考える。
　また、対話的な授業を作っていこうとした時にペアワークやグループワーク、教師からの指名による発表などにどうしても頼ってしまうところがあったが、生徒たちが板書を書き写したノートや教科書に書いてあるメモなどから授業で教師が言っていたことを思い返し、学習に活かしていくことも記憶を通すかたちでの教師と生徒の対話をしているということを今回の講義で学んだので、これからの演習では授業内での活動だけではなく、板書にも今まで以上に目を向けて活動していきたいと考える。

○　小学校での学校ボランティアや教育実習の経験から、今日の講義を聞かせて頂き学んだことが２つある。
　１つ目は手強い問題が出た時の子ども達の自己調整への向かわせ方だ。難しい問題や、前回の授業の応用編などの問題が出ると、「習ってないし、わからへん」という言葉が出ていたことを思い出した。「前のページを見てみたら？」と言葉がけを行っていたが、その行動が子ども達の自己調整を行うための第一歩の手助けとなっていたことを学んだ。
　２つ目はふりかえり方のポイントである。小学校で教育実習を行い、ノートのふりかえりを見せてもらったが、文量の多さや自分の感情を書いている児童が多く見られた。
　しかし、ふりかえりとは「何のために授業を行ったのか」という点を明確にさせるものであり、「面白かった」「楽しかった」などの感想を書く場所ではないことを学んだ。これらの学びから、振り返りを行うことは、「今回の授業はどこがポイントだったのか」を振り返る時間であり、またそれ以降の授業の知識の引き出しとしての役割もあることを学んだ。
　今日学んだことを、今後の教育実習の際や、教員として教壇に立った際、ただ授業の流れの一環として振り返りの時間を置くのではなく、目的意識を持ちながら振り返りを行っていこうと思った。

第 11 回〔５月 10 日（水）〕教育講座Ⅲ
講座内容：講義「京都府における特別支援教育」

○　今後の演習や教員としての実践に活かしていきたいことは２つある。
　１つ目は、的確な合理的配慮を考えていくことである。演習において、ノートを書くことや、時間の見通しをつかむことが苦手な児童が見られる。教員として、必要な支援をするにあたり、特に挑戦したいことは、ICT 機器の積極的な活用である。例えば、今後ますます普及すると考えられるデジタル教科書の音声読み上げ機能の活用を通して、言語を耳から取り入れられる。１時間の授業の中の活動を TO DO リスト化して板書するなどの工夫を通して、一人一人の児童が今何をすれば良いのか明確になる。支援が必要な児童だけでなく、他の児童にとっても有効な手立てになりうることもあるという意識を持って支援に努める。
　２つ目は、他の教職員や関係機関との積極的な連携である。６年間を通して、一貫した支援が必要であると考える。的確な支援を行っていくにあたり、より専門性のある教員等から指導のアドバイスを受けることも大切である。演習において、支援の手立ての迷いから、的確な支援ができないときがある。最近の演習で大切にしている、特別支援学級や通級指導教室の教員との情報共有を、今後も大切にし、子どもの学ぶ権利を保障していきたい。また、連携や自身も勉強することを通して、特別支援教育に関する専門性を身に付けた教員を目指す。

○　今回の講義では、特別支援教育において全ての教員の専門性の向上が必要であると改めて感じた。学んだことを踏まえて、学習面と生活面それぞれで気をつけていきたいと思う点がある。
　まず学習面においては、小さな壁を無くしていくということが大切だと感じた。例えば、文字が多くて文章理解ができない子には、予め問題文を簡単にしたワークシートを用意するなど、その子に応じた教材を準備していきたい。その問題が解けた時には、最大限に褒め、どのような場面でもその児童のいい所を探すように心がけていく。
　生活面においては、児童同士で「障害」という壁をあえて感じさせないように心がけていく。障害があるから出来ないと思い込むのではなく、同じ土台に立てるように教員の合理的配慮を行い、同じ目線で話すことを意識する。
　上記のことを徹底するためには、まず自分自身の専門性がもっと必要だと感じる。教員になってからも学びつづけていきたい。また、視野を広く持ち、自分の常識を覆す場面も必要であることを念頭に置きながら教員として、特別支援教育と向き合っていきたい。

○　今回の講義を通して、特別支援教育をおこなうにあたって教師は「子どもの学ぶ権利」を大切にしながら、個々に合わせた指導を行い、障がいのある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた支援をすることが大切であることを理解することができた。
　今回の講義で学んだことから、今後の演習や教員としての実践に特に活かしたいと思ったことは個々に合わせた指導を行うために児童理解を積極的に行うことである。個々に合わせた指導を行うための積極的な児童理解は、児童が持っている強みを育てたり苦手を克服したりすることにつながると考える。毎日多くの児童と接する教師は、効率化を図り子どもを傾向やカテゴリで分類し、それに合わせた対応や指導を行いがちになる。そうなるとその指導や対応方法に合わない児童の成長は期待できない。教師が児童一人ひとりに目を向けて、その子どもに応じた教育や支援を行うことで、その子どもが持っているよさを伸ばし、苦手と感じる部分を丁寧にサポートすることができる。
　このような子ども一人ひとりが輝ける教育を行うためには、教師の「見る力」と「気付く力」が必要なのではないだろうか。今後の演習では子ども一人ひとりの様子をじっくりと観察して子どもの様子の変化に気付いたり、コミュニケーションを通した子どもの思考の理解を積極的に行

ったり、子どもへの理解の深め方を身に付けたい。

○　私は今回の講座を受けて、特別支援教育について以前の自分より知識が増えた。私の中で教員になって、活かしたいと思ったことが２つある。

１つは通級指導教育において誤解をしている生徒や保護者に対して、正しい知識の共有や誤解のない説明をすることである。私が現在演習をさせていただいている中学校では、今年度新たに通級指導が導入された。そこで現場の教員の方々が懸念していることは、生徒や保護者の誤った通級指導に対する認識である。私が教師になった際は、今回の講座で学んだ特別支援教育の認識を生徒や保護者に対して、誤解がないように、正しい知識を伝え、共有していきたいと思う。

もう１つは、学級活動において障がいのある生徒と障がいのない生徒が、同じ空間で授業を受けられる工夫の仕方である。講座内でグループワークを行った際には、両者の能力差が問題となった。障がいのある生徒が、障がいのない生徒に合わせる活動を行えば、活動についてこられない可能性があるし、逆にすれば、ない生徒にとっては簡単すぎる活動になる可能性がある。そこで大切なのが「個別最適な指導」である。授業を工夫して各個人に意味のある活動にするために、教師が教育的ニーズを把握し、与えることが必要だと感じた。その意識を元に、生徒理解に尽力し、工夫した授業を行えるように活かしたいと思う。

○　今回の講義を通して、私は全ての子どもが同じ場で平等に学べるような授業づくりや環境づくりを行っていく必要があると学んだ。

講義の中で行ったワークで、書くことが苦手な子に対する対応を考えたが、その子の苦手を取り除くことでハンデを無くし周りの子たちと同じスタート地点から「平等」に授業に参加し学ぶことが出来ると考えた。私たちはその子の苦手を取り除くために、キーボードを使用して板書を記録したり、周りの生徒にも板書を写真に撮ることを許可したりするなど考えた。しかし、これは苦手な「書く」という作業を取り除くことには成功しているが、苦手とはいえ「書く」という行為は教育的に必要なことであるからその子だけ「書く」能力を育てる機会を奪うことになるのではないかという意見も出た。

そういった意見や議論を通じて、本当の意味で「平等」に同じ場で学ぶということはそう簡単なことではないと気づけた。そして、教員側が一方的に良かれと思って対応を考えるだけでなく、生徒自身の意志や思いも大切にしながら授業づくりや学級経営を行えるようになりたい。

○　今回の講座を通して、京都府における特別支援教育について、また、交流及び共同学習の意義を理解することができた。そのため、実践に生かしたいことは２点ある。

１点目は、教員として特別支援教育に関する専門性を備えつつ、交流及び共同学習を行う意義を意識して活動に取り組むことである。活動を行うにあたって、漫然と他学級や他校と一緒に活動するだけでは意味がない。交流及び共同学習が子どもたちの人間性を豊かにすることや、障害理解を促進する機会になることを念頭に置き、共生社会を見据えた活動にしていきたい。

２点目は、活動内容において、障害のある人もない人も互いに歩み寄る姿が見られるようにすることだ。事例の中では一方の歩み寄りが顕著であり、共に活躍する場面が見られなかった。そのため、共生社会がともに支え合うことを目指していることも踏まえて、子どもたちが支え合うことのよさを学べる内容になるよう模索していきたい。

以上を踏まえて、交流及び共同学習では、教員として「つながる力」を備えて子どもたちの模範となりつつ、子どもたちにも多様な人と協力して生きる力を身に付けさせられるような教員を目指す所存である。

第12回〔５月13日（土）〕オープン講座Ⅱ
講座内容：①講義「新しい時代の教育の在り方等について
～『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～」
②講義「教員を目指す皆さんへのメッセージ」

○　今回の講義では、今までふわっと理解していた「令和の日本型学校教育」がどのようなものなのか、中村先生のお話を聴く中できちんと確立された。私は二つのことを今後の演習や教員としての実践に活かしていきたいと考えた。

一つ目は教育政策を知り学ぶことだ。教育政策は社会の縮図であると学んだ。教育は世の中の人々の関心が高く、保護者への説明も求められる。政策の方向性を理解し説明できるようにするためにも、教育政策を学ぶ意味があると考える。また、教育政策は中教審のトップの方々が話し合い、折り合いをつけて作られた納得解であり、最新の教育に関する会議であるため、常にどのようなことが議題にあがるのかアンテナを張り、注目していく。

二つ目は、「個別最適な学び」と「協同的な学び」は一体的に充実させることである。それぞれの特徴を活かし、多様な体験を通して子どもたちの可能性を引き出し、どのように社会が変化してもめげない子どもたちを育てていきたい。

教育長の講話は、大変こころ温まる内容で、お話を聴く中で涙があふれた。教師としての「覚悟」より、自分自身が教員に対して「幸せ」を感じ、ロマンティストであり子どもの頃の心を忘れないことが大切であるというお話を聞き、教採に向けて焦っていた気持ちから心の中を見つめ直すことができた。言葉を選び、伝え方を学び、温かい言葉かけができるようになりたいと感じた。

○　今回の講義では今後の新しい教育についてと教育長の想いについて聞いた。本講義での学びから今後に生かしたいことは二つある。

一つ目は令和型の学校教育についてである。令和の日本型学校教育について、正直今までお話を聞いたことがあっても、理解しきることが出来なかった。だが今回の講義を通して、日本独自の教育は守りつつ、新しく見えてきた課題に対してどのように行動していくのかが大切であると学んだ。今後私が教員になれた際にも時代は変わり続けていくため、令和型にとどまらず、何が大切で何に配慮が必要なのかについて考え続けられる教員になりたい。

二つ目は教育長のお話を聞いてである。教員という職はやろうと思えば終わりのない仕事であると私は考えているが、そこで様々なことを追求することが面白さでやりがいだと感じている。今まで私は子どものためには何が必要なのかをすごく考えて来たが、教育長はお話の中で児童・生徒だけでなく先生にとっての幸せが何かについても述べておられ、教員になった際子どものためにはまず自分の土台をしっかり保つ必要性があるのだと考えさせられた。

これらの事を通して、私は自分のためにも児童・生徒のためにも学び続け、児童のためにも自分を作っていきたい。

○　今回の講義を踏まえ、生かしていきたいことは２つある。

１つ目に、「伝える力」を身に付けることである。私自身、気を配ることに関しては長けていると自負していたが、現場に出てみると、気付いたことをうまく言語化できず、もどかしい思いをすることが多かった。周囲の先生方がうまく言葉を引き出してくださることも多く、自分の長所を生かせていないと感じた。そんな中、教育長の講義で「伝える力」の重要さを再認識することができ、これからは言葉を吟味しつつ、伝えたいことを自分の中で明確にしていきたいと思った。また、感情を入れることが必ずしも悪いことではないと知り、不安や悲しみといった負の感情であっても、感情を表すことで明日を元気に過ごせるのならば表現して、前向きに捉えていこうと思った。それがレジリエンスにもつながると思った。

２つ目に、教育政策を教師としての「軸」づくりに生かしていくことである。これまでは漠然と読むことが多かった教育政策だが、自身の授業実践などを見直す指標だと捉え、実践の充実につなげていきたい。その際、独りよがりに何事も決めるのではなく、他の教職員と児童や地域等の実態をしっかり話し合ったうえで、具体的な指導計画や方針を決めていくようにしたい。

○　今回の講座と講話をふまえて、今後の実践に生かしていきたいことは二つある。

一つ目は、自分事として捉えることができる授業を行う。京都府の教育の現状として、基礎・基本の定着の一方で学ぶ意義を実感できる生徒の育成に課題がある。私は教育実践演習で経験した社会科と道徳の授業をもとに、学ぶ意義を実感できる授業を行う。特に暗記が目的になりやすい社会科では、現代の諸問題と関連付けること、因果関係を適切に踏まえさせることに重点を置く。このような社会的な見方・考え方を育成することができる授業を行うことで、生徒の学ぶ意義の実感に繋げていく。

二つ目は、気づくことに重点を置く。講話を通して五つの力の関係性を知った。自身の経験と五つの力の関係性を踏まえて、起点である気づく力を特に大切にする。私は学生時代に、死別、いじめなどの辛く、弱い立場を身近に経験した。伸びるためには学習に取り組むことができる環境にある必要があるため、特に辛い思いをしている生徒に対して、自身の経験を生かし、寄り添った包み込まれる感覚を与えていく。そのために生徒と日常的に関わり、小さな変化も見過ごすことなく気づくことが出来る教師を目指す。

以上のように、京都府の現状や教育理念に基づいた教育活動を行う覚悟である。

○　今回の講座と講話を受けて、私は「令和の日本型学校教育」について以下の二つを実践に活かしたい。

一つ目は、「協働的な学び」において教員はコーディネーターとして関わっていくということである。外部の方が授業を行う目的・ねらいや生徒とどのように関わってほしいかを「教育の専門職」という立場で相手側に提示する必要がある。「学校外の人が参入した方が効果的であり、子どもたちもきっとワクワクする」という思いが教師側にあって初めて成立する学びであるため、今後、授業を展開していく上で「どのような力を子どもたちに身につけさせたいか」といった軸を明確にして行っていきたい。

二つ目は、「相手の背景を想像する」ということである。教育長の講話の中で「優しさとは相手のことを想像する力である」という言葉があった。他の講座生の質疑応答を経て「あの時生徒にどういう言葉をかけていたら正解だったのだろうか」と考えることよりも、「あえてその質問を生徒が投げかけてきたのはなぜだろう、何か思っていることがあるのだろうか」と想像することの方が大事であると私は気づいた。言葉の選択にも気を配りつつ、子どもの背景を探ろうとする姿勢を絶やさないようにしたい。

以上の内容を活かし、生徒との関わりに繋げていく。

○　私は今後の演習や教員としての実践に、二つのことを活かしていきたいと考える。

一つ目は子どもたちと同じように学び続けることである。子どもたちは日々、学校という場で新しい学びに立ち向かい、悩んだり、友達や先生と考え解決をしたり、試行錯誤で学びを深めていっている。

教師は子どもたちに「教える」という立場であるから何を学ぶべきなのか分かった気持ちで常に自分も新しいことを学ぶという気持ちを持つことを意識していきたい。

二つ目は、子どもたちに伝えるときの姿勢や言葉選びに気をつけることである。ただ伝えたいことを伝えるのではなく、どうしたら子どもたちの心に刺さるだろうと考えることが大切であると考える。現在、注意するときなど特に否定的な言葉ではなく言い換えることを意識して演習に取り組んでいる。同じ内容でも言葉を変えていうことで子どもたちは理解をしてくれることを実感した。

以上の二つのことを意識して、今後の演習や教員としての実践に活かしていきたいと考える。

第 13 回〔５月 17 日（水）〕教育講座Ⅳ
講座内容：講義「ＩＣＴを活用した授業実践」

○　私は、「ＩＣＴを活用した教育実践」のために、教員と児童生徒の両方が主体性を持って学び、自律的に行動することに留意する必要性があると考える。答えのない問いに向き合うことが求められる中で、自ら行動を起こすことが全ての始まりであると考える。そのために、私は以下の二つの実践を進める。

一つ目は、教員としてＩＣＴの活用の学びを深めるために、つながりを多く作ることである。養成講座生だけでなく、演習校の先生方ともつながりをもち、ＩＣＴ活用の方法を共有し、自らの授業に取り入れていく。多くの人と色々な授業実践を試していくことで、よりよい活用方法を作り上げていきたい。

二つ目は、子どもたちの活用方法を限定しすぎないことである。ある程度のルールは必要であるが自分で考えて使うために、方法を柔軟に捉えられるようにする。その中でより良い活動になるよう、誤った使い方にならないよう指導していきたい。

以上のように教員のつながりと柔軟な活用によって、それぞれが主体性と自律性をもって行動していく。積極的に活用していくことで、ＩＣＴ活用の学びを深め、授業づくりに生かしていく。

○　「ＩＣＴを活用した教育実践」を進める上での留意点は、ＩＣＴを活用すべき場面かそうでないのかを見極め、使い分けることだと考える。また、ＩＣＴの活用を目的とするのではなく、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた手段として考えることが重要である。何のためにＩＣＴを使っているのか明確にした上で活用していきたい。

私は今後、「児童が主体的に学習に取り組むことができる」ようにＩＣＴを活用していきたいと考える。児童の主体性を高めるためには児童自ら「学びたい」「調べたい」という意欲を引き出す必要がある。ＩＣＴを活用することで、「個に応じた学習」がしやすくなる。児童一人一人の実態に応じて、学習の方法を変化させることで、取り残され学習に対する意欲が低下するという問題を防ぐことができると考える。児童に選択肢を与えることで、児童が最も興味・関心をもって取り組める学習を選ぶことができる。

本日の講義を受講するまで「ＩＣＴを活用するために～を行う」という考え方があった。しかし、そうではなく「○○するためにＩＣＴを活用する」という考え方にするべきと学び、この視点をもってＩＣＴ活用をしていきたい。

○　これからの予測不可能な時代を生きる子どもたちに必要なのは、問題発見力や的確な予測をする力など、これまでと大きく変わっている。個別最適な学びを通してこの力が身に付くと考えた。これは子どもが学びのツールを選択できるようにするなど、ＩＣＴの活用が欠かせない。

ＩＣＴを活用した教育実践で留意するのは情報モラルを身に付けることである。子どもが日常でモラルの本質を理解し、情報モラルを身に付けるために、まずは教員自身が情報モラルを身に付ける必要がある。著作権侵害やセキュリティに関する教員の不祥事をよく目にする。これは決して他人事ではなく、自分にも起こりうることだと自覚して、慎重に実践する。

また、今後の演習やボランティアで、先生方がＩＣＴをどのように活用しているか学び、自身の指導に取り入れたり、京都府デジタル学習支援センターのホームページでアイデアを学んだりして自分の引き出しを増やす。そして、教員になったら地域や教員とＩＣＴについての情報を共有し、学びを深めることで独りよがりにならないよう意識する。

ＩＣＴを活用するために授業づくりをするのではなく、目的を達成するためにＩＣＴを活用するという考えを大切にして情報モラルやセキュリティに留意しながら授業づくりと学級経営に励む。

○　本日の講義でも、個別最適な学びのためにはＩＣＴの活用が不可欠であると言われていたように、ＩＣＴは教育において欠かせないものとなっている。だが、ＩＣＴを活用していく上で、情報モラルの指導や、ＩＣＴを使用することに困難を感じている子への支援など、留意すべき点も挙げられる。留意すべき点をふまえて、私は以下の二点について具体的に実践していく。

まず一つ目は、授業内外での調べ学習を行うことである。正しい情報であるか否かを判断するためには、子ども自身に体験させることが一番良いのではないかと考えるため、教科を問わず、インターネットを利用した学習活動を行い子どもに情報の取捨選択能力を身に付けさせたい。

二つ目は、教員自身がＩＣＴに関わる様々な交流の場に参加し、知識を身に付けることである。知識を身に付けると共に、他校種の方々ともたくさん交流をし、ＩＣＴに困難を感じる子どもの支援について考え続けていきたい。また、様々な支援方法、活用方法についても学び続けていこうと考える。

以上のような実践を行いながら、高い意識をもってＩＣＴ教育に向き合っていける教員となりたい。

○　ＩＣＴ教育を進める上で、授業だけでなく、授業との組み合わせを含めた日常的な活用を積極的に行うべきであると考える。そのためには「〇〇するためにＩＣＴを活用する」という視点を大切にしていきたい。そのような視点をもとに今後、実践していきたい点を二つあげる。

一つ目は、未来を想定した教育を実践していきたいと考える。これからの社会を担う人を育てる立場として、社会に出たときに必要となる力を見据えた教育をしていくべきだと考える。クリエイティブな考えを育て、新たな価値観を育てるためにＩＣＴ教育を実践していきたい。

二つ目として、デジタルシチズンシップ教育より、日常からＩＣＴを活用していきたい。今の教育現場ではモラル違反を恐れ、ＩＣＴ教育の推進に抵抗感がある考えも散見できる。しかし、生徒を信じ、失敗を恐れず一度やってみようという取組も危険への対応を準備しながらＩＣＴ教育を牽引していきたい。

これら二つのことを実践する上で、自分自身が失敗を恐れずトライする気持ちをわすれず、ＩＣＴ教育を進化させていきたいと考える。

○　特別な配慮を要する生徒が増加している昨今、ＩＣＴを利活用して、学びの機会を保障することが可能になる。また、変化が激しい社会においても、新たな価値を創造し、還元できる力が求められているという背景を鑑みて、私は二点を実践する。

まず、生徒への配慮や教材の工夫、働き方の改善にＩＣＴを有効活用しつつ、人や地域、教職員同士等のつながりを拡大する。生徒の特性や興味関心に応じて、学習形態を変容させたり、資料を用いたりすることは、生徒がより主体的に問題の本質を捉える学びには必要不可欠である。しかし、ＩＣＴの使用ばかりに執着することなく、教室内で各個人の学びを広げるためにも協働や学外連携を通した活動の充実が必要である。

次に二点目としてＩＣＴの利活用や実践例について学び続け、教職員や地域社会にそのノウハウを共有していきたい。なぜならば、生徒の学習機会の保障や新たな価値の創造、学外の人材・機関との交流には、ＩＣＴを通して、求められる教育を実現するには教育に携わる全ての者が貢献しなければならないからである。

○　「ＩＣＴを活用した教育実践」を進める上で、児童生徒に付けたい力を明確にすることを留意する必要があると考える。ＩＣＴを活用することで、児童生徒が紙などの教材では興味を示さなかった学びに対して関心を持つ可能性がある。文字だけでなく、イラストや動画など様々な角度から情報を得ることができるからである。ＩＣＴは児童生徒にとって興味・関心が持てることとともに主体性を引き出すことのるツールである。そのため、ツールをどのように生かしていくのか目的を持って活用することが大切であると考える。

今後、児童生徒の実態を理解した実践を進めていきたいと考える。特別支援学校の児童生徒の実態を理解した実践を進めていきたいと考える。様々な特性を持ち、一人一人ができること、言葉の理解が異なる。そのため授業の目標もそれぞれで異なる。どのような目標を立て、それを達成するためには、この子にはどのような力を付けたいという目標を立て、その達成に向け、楽しく主体的に活動するためにＩＣＴを活用していきたい。

第14回〔５月31日（水）〕閉講式
講座内容：①主催者挨拶・説示　②各演習校代表あいさつ
　　③講座生交流　　④講話